

【資料編】昔の笠間焼 江戸時代～昭和時代

江戸時代後半 笠間焼のはじまり

江戸時代の安永年間(1780年ごろ)、箱田村(現在の笠間市箱田)の名主の久野半右衛門が、信楽(現在の滋賀県)出身の陶芸の職人・長右衛門と出会い、やきものづくりを始めたといわれます(箱田焼)。笠間地域のやきものは、のちに笠間藩によって、大切に守られてきました。



久野陶園 久野半右衛門が始めた窯で、笠間焼のはじまりの窯。

明治・大正時代 「笠間焼」の広がり

明治2年(1869)に、美濃(現在の岐阜県)出身で、やきものを売る仕事をしていた田中友三郎が笠間にやってきます。友三郎は、箱田焼とその周りで作られていたやきものをまとめて「笠間焼」という名前にして、県外で広く売り出します。こうして「笠間焼」の名前が全国に知られるようになります。また友三郎は、やきものを作ったり売ったりすることを仲間で協力し合うためのくみ(陶器製造組合)や、やきものの技術を教える学校(陶器伝習所)などをつくる時に中心となり、笠間焼を成長させました。



田中友三郎 (1829-1913)

昭和初期～昭和24年(1949)ごろ 伸び悩む笠間焼

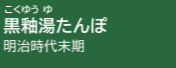
昭和16年(1941)、太平洋戦争が始まります。戦争の混乱で、笠間焼をつくるのが難しくなります。戦争が終わった時には、窯元(やきものを作って売っている家)の数はわずか8軒まで減ってしまいました。さらに昭和24年(1949)頃からはプラスチック製品が広がり、笠間焼の主な品物であった水がめや、すり鉢が使われなくなります。品物が売れなくなった笠間焼は大きなダメージを受け、苦しい時代になりました。



すり鉢 播鉢 明治時代



白釉青流掛茶壺 明治～大正時代



黒釉湯たんぽ 明治時代末期

昭和25年(1950)ごろ～

現代につながる動き 昭和25年(1950)、茨城県窯業指導所がつくられ、研修生制度をつくります。当時、窯業指導所のリードで、笠間焼の復活を自覚してアメリカ、カナダへの輸出や笠間焼のデザインの改良運動や、時代に合った品物(コーヒーカップや花瓶)づくりへの変更も行われましたが、現在の「作家の街・笠間」のもとになったのは、陶芸団地や芸術の村をつくるなどの、県外から作家を呼び寄せる活動だったといえます。

“作家の街・笠間”の成り立ちについては、この資料の中面に詳しく書いてあるよ!



【昔の笠間焼って何をつくっていたの?】

プラスチック製品が使われるようになる前は、多くの生活の道具がやきものでできていた。笠間では、江戸時代は水がめや、すり鉢、茶つぼ(お茶の葉を入れるつぼ)、明治時代からはそれらに加えて、湯たんぽや鳥の水やりなど、様々なものがつくられていた。



かさまやまてなにあに!



ケラモン 茨城県陶芸美術館 教育普及キャラクター

いまの笠間や、周りの地域では、いろいろな土を使って、いろいろな色や形のやきものがつくられている。笠間焼にはどうしてこんなに種類があるのかな。くわしく見てみよう!

もっと知りたい! やきものこと、笠間のこと

笠間焼のこと、やきもの基本的な知識について学べるリンク集です。インターネットにつながる機器で、二次元コードをよみると、リンク先のページを表示することができます。

笠間焼協同組合ウェブサイト
笠間焼の歴史や、陶炎祭の昔の写真を集めた「陶炎祭写真館」などの資料を見ることができます。

茨城県立笠間陶芸大学ウェブサイト
大学校のようすや学べること、卒業生の活躍のようすを知ることができます。

茨城県陶芸美術館ウェブサイト
(技法解説ページ)
やきものつくり方や技法を簡単に紹介しています。

表紙の作品一覧
(茨城県陶芸美術館ウェブサイト)
表紙の作品の情報(作家名、タイトル、制作年など)を見ることができます。

©本パンフレットの画像掲載に際しては、以下の関係先にご協力を賜りました。
茨城県立笠間陶芸大学校 / 笠間焼協同組合 / GARAGE / 久野陶園をやっていく会 / 陶と暮らし実行委員会 / 端章一 / 矢野津々美

©本パンフレットに図版掲載の作品で、所蔵先の記載のないものは、茨城県陶芸美術館所蔵です。

2026©茨城県陶芸美術館

茨城県陶芸美術館 IBARAKI CERAMIC ART MUSEUM

〒309-1611 茨城県笠間市笠間2345(笠間芸術の森公園内)
Tel 0296-70-0011 Fax 0296-70-0012
https://www.tougei.museum.ibk.ed.jp/

茨城県陶芸美術館ウェブサイト
開催中の展覧会やイベント情報はこちらから

“作家の街・笠間”のはじまり

笠間焼にいろいろな種類があるのは、笠間が“作家の街”だからだよ。いま、笠間と周りの地域では、約300の窯元(やきものをつくる人や会社)がある。その多くが作家の工房だ。作家とは、自分が考える好きな色や形を、やきものにする芸術家のこと。ここでは、笠間が作家の街になったきっかけを紹介するよ。

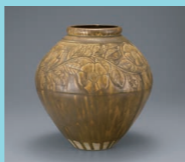


1. アートとしてのやきもののはじまりと、笠間での動き

日本では、大正時代(1910年代)に、芸術としてのやきものをつくる人(=作家)があらわれ、展示会も開かれるようになります。生活に使うやきものをつくる産地だった笠間でも、板谷波山(1872-1963)に学んだ塙彰堂などが展示会で作品を発表し、作家として活躍しました。



塙彰堂



塙彰堂「鉄釉彫文花瓶」
大正15年(1926)
～昭和22年(1947)

2. 時代に合った笠間焼へ - 笠間に作家を集めよう!

昭和の中頃になると、太平洋戦争などで笠間の窯元はわずか8軒まで減ってしまいます。その上、やきものに代わりプラスチック製品が使われるようになり、笠間焼の品物が売れなくなります。笠間焼がなくなること心配した人たちが、時代に合った笠間焼づくりを進めるため、茨城県窯業指導所をつくりました。さらに陶芸団地、笠間芸術の村、窯業団地をつくり、県外から作家を呼びよせたことで笠間は作家の街になりました。



当時の茨城県窯業指導所(笠間市下市毛)
(『茨城の窯業史』p.40掲載)



3. 笠間の作家の活躍

笠間の作家の中からは、日本だけでなく世界でも活躍する作家が出てきて、“作家の街・笠間”が有名になりました。茨城県窯業指導所で学んだ人や、作家に弟子入りした人などが、自分も作家になって、笠間に住むようになります。大きな展示会に入賞する作家や、日本だけでなく外国で自分の作品の展示会を開く作家もつぎつぎにあらわれます。

◆1970、80年代から活躍した主な作家

【松井康成(長野県出身:1927~2003)】
 昭和35年(1960)笠間市内の月楽寺に窯をついた。平成5年(1993)重要無形文化財「練上手」保持者(いわゆる人間国宝)になる。

まついこうせい
松井康成

【伊藤公家(石川県出身:1932~2024)】
 昭和47年(1972)笠間に窯をつくる。昭和59年(1984)ヴェネツィア・ビエンナーレという世界的に有名な現代美術の展示会に日本代表としてやきものの作品を出品。

いとうこうせい
伊藤公家
Photo by Horie Yuko

【伊藤東彦(福岡県出身:1939~)】
 布目の模様の作品で知られる。窯業指導所で研修のあと、昭和45年(1970)笠間に窯をついた。昭和49年(1974)に日本伝統工芸展という大きな展示会で賞を取った。

いとうとうご
伊藤東彦
Photo by Ito Komako

◆近年活躍する作家の例

 いのうええいじ 井上英基「碧影鉢」平成27年(2015) 第23回日本陶芸展大賞・桂宮賜杯	 いのうえまゆみ 井上雅之「NT-171」平成29年(2017) 第24回日本陶芸展大賞・桂宮賜杯
 ごしまりょう 五味謙二「Shi-tou」平成31年(2019) 第25回日本陶芸展大賞・桂宮賜杯	 あいざわりえ アイザワリエ「縹」令和3年(2021) 笠間陶芸大賞展一部公募部門準大賞
 ほんまあきひろ 額賀草夫「Indigo bud vase」平成29年(2017)	 こまつりょう 小堤晶子「ブレーメンの音楽隊ティーセット」令和4年(2022)

いまの笠間と、やきものようす

茨城県窯業指導所は、平成28年(2016)に「茨城県立笠間陶芸高等学校」に変わったんだ。これまで窯業指導所および陶芸高等学校でやきものの勉強をした人は、のべ900人以上いるんだって。やきものづくりをリードする作家が、これからも“作家の街・笠間”からたくさん羽ばたいてほしいな。

いまの笠間は... その1

笠間では現在も多くの作家が、自由に作品をつくっています。作家が中心となって開かれる陶炎祭をはじめ、オープンアトリエ(作家の仕事を公開するイベント)や展示会など、現在も作家同士が協力して新しいことにチャレンジしています。

たくさんの作家が活動する場所



笠間市内の作家の工房(額賀草夫) 撮影:矢野津々美



GARAGE(ガラージ)
2007年に作家たちが笠間市内の古い建物を利用して作った、月に1、2回作品展示やワークショップを行う場所。

作家をめざして やきものに挑戦できる場所

茨城県立笠間陶芸高等学校では、毎年15人、陶芸作家をめざす人々が入学しています。日本だけでなく外国から入学を希望する人もいます。現在活躍している作家である先生から、やきものづくり方や芸術表現について学ぶことができます。



茨城県立笠間陶芸高等学校での授業の様子

いまの笠間は... その3

やきものに触れられる場所

ゴールデンウィークに開かれる「陶炎祭」をはじめとして、年に何度も大きな陶器市が開かれ、作家と直接会うチャンスが多いのも笠間の特徴です。また、多くのギャラリーや窯元でも作品を見ることができます。茨城県陶芸美術館では、笠間のほか、日本の近現代の陶芸作品を見ることができます。



「陶炎祭」の様子



陶器市「陶と暮らし。」の様子



茨城県陶芸美術館



第一回陶炎祭、仮面を付けた行列の様子
昭和57年(1982) 撮影:福田浩男

【「伝統的工芸品」と「日本遺産」】

平成4年(1992)に笠間焼は経済産業省が指定する「伝統的工芸品」になった。また、令和2年(2020)には、「かさましこ〜兄弟産地が紡ぐ「焼き物語」〜」として益子焼とともに日本遺産に認定された。(益子焼は笠間からやきもの技術が伝わってきたので、兄弟産地と言われている。)

やきものは、見たり、ふれたり、使ったり、いろいろな方法で楽しめるから、生活を豊かにするものとして、そのよさが見直されているよ。やきものを通じて、みんなに豊かさを届けているのが、いまの“作家の街・笠間”のすがたなんだね。

